

	方剂名	効能	生薬組成
	書籍	主治および証	病機 方意
治風剂 平熄内風剂 1	いかくこうとうとう 羚角鈎藤湯 (羚羊鈎藤湯)	凉肝熄風	羚羊角 4.5g・桑葉 6g・川貝母 12g・鮮地黄 15g・鈎藤 9g・菊花 9g・ 茯神木 9g・生白芍 9g・生甘草 2.5g・竹茹 15g 水煎し服用する。
	通俗傷寒論	<主治> 肝経熱盛、熱極動風 高熱の持続、煩躁、狂乱、頭が脹る、めまい、けいれん、頸項部の強直、後弓反張、甚だしいと四肢の冷え、舌質が絳で乾燥、脈が弦数などを呈す。 <病機> 温熱の邪が血分に深く入り、肝経熱盛から熱極生風をきたした状態である。 血分熱盛のために高熱が続き、舌質が絳で乾燥、脈が数を呈する。熱邪が上蒸して気血が上涌するために、頭脹、頭暈が生じる。肝熱熾盛で肝陽化風して筋脈が拘急し、熱盛傷陰による筋脈失養、更に灼液成痰による肝風挾痰阻絡が加わって拘急が加増し、手足のけいれん、頸項強直、口噤（歯をくいしばる）、後弓反張などを引き起こす。熱邪擾心のために煩躁狂乱が生じたり、邪熱内熾で陽気が内に閉鬱されて四末に達しないと四肢の冷えがみられることもある。脈弦は肝脈である。 <方意> 凉肝熄風を主体に滋陰増液、化痰通絡を配合する。 鹹寒の羚羊角は凉肝熄風に働き、甘、微寒の鈎藤は平肝熄風すると共に軽清宣透により肝熱を疏散する。両薬により凉肝清熱、平肝熄風の効果が得られ、本方の主薬である。軽清宣透の桑葉・菊花は、平肝熄風、清散肝熱の効能により主薬を補佐する。清熱化痰の竹茹・貝母は、痰を除き通絡する。鮮地黄・白芍・生甘草は、酸甘化陰により滋陰増液し、柔肝舒筋の効果をあげる。茯神木は平肝、寧心安神に働く。 <参考> 本方（羚羊鈎藤湯）は、熱極動風に対する代表方剂で、温熱病の高熱発瘧に適している。 熱邪内閉による意識障害を伴うときは、安宮牛黄丸、紫雪丹などの清熱開竅剂を併用する。 本方（羚羊鈎藤湯）は、肝陽上亢、化風による頭痛、ふらつき、振戦などにも適する。	